霧島アートの森で大寺聡展

自然と寄り添う暮らし

イラストレーターの仕事一堂に

日置市吹上在住のイラストレーター大寺聡さん(51)の個展「Ohtematic 2018（オーテマティック ニイゼロイチハチ）」が霧島アートの森（湧水町）で開かれている。最新のデジタル技術と豊かな自然の接点をテーマに創作する作品と、多岐にわたるイラストレーションの仕事が一堂に会する展覧会となっている。

オーテマティック ニイゼロイチハチ

大寺聡さんの作品集の表紙に使用されている「Fast City」

同園が本年度始めた、地元芸術家に展示ロビーを開放する「アートラボ」事業の第4弾。今回の総展示数は平面、立体、映像など約200点に上る。

大寺さんは開催に合わせて、初の作品集「オーテマティック 大寺聡作品集」（フィルムアート社、2376円）を刊行。鹿児島大学の井原慶一郎教授が監修し、半生を振り返り、創作アイデアやインタビューを収めた。展覧会の公式ガイドブックにもなっている。

「ステレオ・ライフ」の1作品「At the Waterside（水辺にて）」

個展は、作品集の第3章「パノラマ」の「ステレオ・ライフ」と題した平面作品を中心に展示。「ステレオ・ライフ」は、トランプ大統領、プーチン大統領らしき人物が集う「各国首脳の表情」を皮切りに、経済一辺倒主義や都市部への一極集中、人口流出に疑問を呈し、カタストロフィー（破壊）を経て、自然と文明の共生を見いだしていく物語仕立てとなっている。

「イラストレーターの仕事を知ってもらう機会になれば」と語る大寺聡さん＝湧水町の霧島アートの森

「虫自慢が多極分散型社会を作る」という言葉を題材に制作する大寺さん。「虫や自然に寄り添い、暮らす方が豊かな人生を楽しめるという思いを込めた。原画や下絵も展示しているので、完成作と見比べてみてほしい」と話す。

また、東日本大震災をきっかけに生まれたシリーズ「After 311」も公開。渋谷駅に群がる巨大カナブン、パソコンのキーボードをはうムカデなど、それぞれに違和感やユーモアが共存し、不思議な魅力に満ちている。

展覧会と作品集のタイトルである「オーテマティック」は、イラストレーターとして約30年間使い続けている造語で「自分というフィルターを通すと、こんな世界が生まれてくる」。

鹿児島マラソンのポスターデザイン、人気ボーカルグループ「GReeeeN」のCDジャケットなど、これまで手掛けた多彩な仕事も紹介。大寺さんは「ポップカルチャーやデザインは生活に密着した美術。イラストレーターの仕事もこの機会に知ってほしい」と語った。

（福留梓）

◇

4月15日まで。月曜休園。一般310円、高大生200円、小中生150円、幼児以下無料。3月25日、4月1、15日は大寺さんらのトークイベント、3月11、18、21日、4月8日は公開制作がある。いずれも午後2時～3時半。